

『虞美人草』クレオパトラ&ハムレット

Junko Higasa 2013.9.26

Ⅹ クレオパトラ7世 (Cleopatra VII Philopator)

父プトレマイオス12世と姉ペレニケ4世の王位をめぐる骨肉の争いの末、父の遺言で王位継承した古代エジプト・プトレマイオス朝の最後のファラオ。美貌は特別ではなかったらしいが、類いまれなる美声と数か国語を繰る語学力と魅力的な話術でカエサルを魅了。カエサルの死後、アントニウスを魅了。勢力争いに敗れ自死。『虞美人草』の藤尾と共通するところは語学堪能・家督相続の役割を負わされるところ。色香という武器を使って男を翻弄するのは漱石の嫌うところであったが、いずれも男性社会で武力に頼れず、家督存続のために、1対1であれば必ず男に勝つ「女」という武器で戦うしかなかった。

£ ハムレット (Hamlet)

ウィリアム・シェイクスピアが1600~1602年頃書いた戯曲「The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark(デンマーク王子、ハムレットの悲劇)」の主人公。「To be or not to be, that is the question」—今日「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ」と解釈されるが、かつては「復讐するべきか否か、それが問題だ」という意味でも捉えられた。「復讐すべきか否か」は喜劇だろう。「生きるべきか、死ぬべきか」は悲劇である。「シェイクスピアが書いたクレオパトラはその性格がよく現れている」と小野さんに語らせた『虞美人草』もまた同様の悲劇である。